

『ロビンソン・クルーソー』と大英帝国(1)

千 井 洋 一

1 『小説の勃興』と宗教的解釈

二十世紀半ばにデフォー再評価の気運が高まったが、その切掛けを作ったのはイアン・ワットであった。彼はミドルクラスの興隆と新ジャンルである小説の勃興との間に深い関連があることを指摘し、小説という新ジャンルの成立をめぐる様々な議論に先鞭をつけることになった。ワットは『小説の勃興』において、『ロビンソン・クルーソー』は個人主義(individualism)、とりわけ経済的個人主義が際立つ作品であり、形式的リアリズム(formal realism)が達成された最初期の作品であると論じた。彼は形式的リアリズムについて「経験を現実的なかたちで写したもの、登場人物の個性が詳しく描かれた出来事に現れること、具体的な時間場所が示されること」という定義を与えている。¹

極めて大きな影響力を持った『小説の勃興』が出た後、デフォー研究はワット論の精緻化またはその乗り越えという形で展開していった。中でもスターとハンターらによる宗教的要素に着目したアプローチがその代表的なものとなった。彼らはピューリタンによって書き継がれた霊的自叙伝(Spiritual autobiography)の系譜が『ロビンソン・クルーソー』の中に脈々と受け継がれているとし、デフォーの小説群には「回心へ至るパターン」(破綻するパターンも含む)が存在すると論じた。² 現行のロビンソン・クルーソー研究は多岐にわたるものの、現在でも上述の二つの解釈は依然として大きな影響力を保っている。

以前に別稿で詳しく論じたように、作品解釈を行うときには常に何らかの解釈上の枠組みを用いており、理論的視座をまったく欠く作品解釈はあ

り得ない。³ 作品解釈と文学理論とは不可分なものであり、「虚心坦懐に読む」という言葉はあるものの、実際はそのような行為は存在しないのである。それでは上述の2タイプの解釈はそれぞれどのような理論を前提としているのであろうか。

第一に、ワットの経済的個人主義を重視する解釈は、近代社会の誕生と小説の勃興とをリンクさせる歴史主義的・社会学的アプローチに拠っていると見えるだろう。クルーソーの原罪とは「資本主義それ自体が持つダイナミックな傾向」⁴ そのものであるとワットが主張するとき、彼は、資本主義の発達がミドルクラス興隆を促し、さらにミドルクラス読者層の増大が新たな文学ジャンルである小説の勃興をもたらしたという社会観をその理論的バックボーンにしている。ミドルクラスの代弁者であるデフォーが作り出した、主人公クルーソーはミドルクラスの資質を体現しており、その結果、主人公は現状維持でなく絶えざる現状変革を行うように定められた存在となる。確かに、ワットが用いた社会学的アプローチからすれば、クルーソーが繰り返し唱える原罪とは実は、父の助言に従わず神意に背くことではなく、クルーソーがミドルクラスとしての資質を作中で発揮すること自体にあるということが出来るだろう。

また、ワットは小説が持つべき最終目標の一つとして、有機的統一性を重視しており、この見方は二十世紀半ばに一世を風靡したニュークリティシズム的文学観と呼応している。また、ワットは新ジャンルである小説と、それ以前の文学形式であるロマンスとを分かつ基準として、形式的リアリズムという概念を導入しており、これらの基準をもとに、彼は小説の創始者たちに対し、次のような評価を下した。まず、ワットに拠れば、デフォー小説がもつ最大の欠点はフィクションとしての有機的統一性を欠くことにある。デフォー小説が備えている真実性 (verisimilitude) は、近代以前のロマンスからの断絶という点からは非常に望ましい特徴なのであるが、逆に、その特徴がデフォー小説を現実世界に近すぎる作品にしてしまい、全体のまとまりを欠いた、エピソード的なものになっているとワットは考える。また、ヘンリー・フィールディングの作品に対しても、作者の

介入が多すぎることで、偶然に基づく出来事が多すぎることで難点となると断じ、最終的には、サミュエル・リチャードソンを最も高く評価するという結論に至っている。

現在の見方からすれば、ワットの文学観は小説というジャンルに対する進化論的な眼差しが強すぎるということになるであろう。また、小説の創始者として、女性作家が一人も取り上げられておらず、現状維持的な男性優位の文学キャンノンに基づいていることも問題となる。

第二に、スターやハンターらを始めとする宗教的解釈を行う論者たちは、『ロビンソン・クルーソー』が、ピューリタンによって書き継がれた霊的自叙伝 (Spiritual autobiography) の系譜のもとにあると論じており、その意味ではスターやハンターらが拠って立つ理論は歴史主義的アプローチであるといえる。また、クルーソー研究を二分する両派である、ワット派と宗教的解釈派は共に、作品が持つべき理想として有機的統一性を重視している。その結果、ワットはデフォーの小説群をエピソードであると論じたが、宗教的解釈はデフォーの小説群に回心へと至るパターンを見出すことにより、作品をより統一的に解釈することに成功している。

以上のように、経済的個人主義を重く見るワットと、スターやハンターを始めとする宗教的解釈派がそれぞれ抱くデフォー観やクルーソー観には大きな相違があるのだが、両者が拠って立つ理論がともに歴史主義的であることは興味深い。また、優れた文学作品は有機的統一性を備えるべきであるという両者の文学観は、ニュークリティシズムが拠って立つ文学観と通底する部分がある。

2 ポストコロニアリズム

人間観や世界観を一変させるような思想家たちが現れると、まったく新たな視座から作品が眺められ、新たな解釈が生み出される。クーンのパラダイム論を用いて敷衍するならば、新たなパラダイムが打ち立てられた後、周りの世界は一変し、これまで問われたことのない新しい問題群が立ち現

れるのである。⁵たとえば、クルーソー研究の分野では、フロイト思想の登場がそれに該当する。ホーマー・ブラウンは、なぜクルーソーは自らの砦作りにあれほど異常な熱意を持って取り組むのかという問題を提起し、説得力に富む鋭い分析を行ったが、ブラウンの解釈は、フロイト自身の『グラディーヴァ』分析を嚆矢とする精神分析批評の登場なしには生まれなかったであろう。⁶同様な例として、サイードらを始祖とするポストコロニアル批評を挙げることができる。

A great deal of recent criticism has concentrated on narrative fiction, yet very little attention has been paid to its position in the history and world of empire. Readers of this book will quickly discover that narrative is crucial to my argument here, my basic point being that stories are at the heart of what explorers and novelists say about strange regions of the world; they also become the method colonized people use to assert their own identity and the existence of their own history. The main battle in imperialism is over land, of course; but when it came to who owned the land, who had the right to settle, and work on it, who kept it going, who won it back, and who now plans its future — these issues were reflected, contested, and even for a time decided in narrative.⁷ (下線は筆者)

サイードの指摘は鋭い。帝国と「植民地にされた側」との闘いは当該の植民地自体の物理的支配をめぐるものではあるが、言説上の闘いも、同様またはそれ以上に重要なものである。「その地を手にし住み続けるのは誰であるべきか、土地を奪い返す権利を持つのは誰か、その地の将来図を書くのは誰か」といった問題を決めていくのは、植民地をめぐる言説だからである。

構造主義、ポスト構造主義以降の理論は言語をめぐるアポリアに力を注ぐあまり、外的コンテクストを捨象してしまう傾向があった。その結果、現実世界に対しては現状追認的な効果をもたらしてしまう。これらと異なり、「我々は芸術をグローバルなコンテクストのもとに置かねばならない」

と論じるサイドが最も重視しているのは、植民地解放後も依然として続いている、欧米による発展途上国に対する経済的文化的収奪に着目することである。⁸ 欧米のヘゲモニーが言説によってどのように創り出されているのかという新たな視座を構築することによって、これまで全く行われなかった新たな解釈が登場している。例えば、ポストコロニアル批評が存在しなければ、『マンスフィールド・パーク』のカリブ海域アンティグアをめぐる短いエピソードに焦点が当てられ、オースティンの世界を支えているのは「奴隷貿易、砂糖、植民地の農園主階級」を生み出す植民地支配そのものなのだという解釈は生まれてこなかったであろう。⁹ このように、新たなパラダイムへの移行後は、これまで問われたことのない新しい問題群が立ち現れるのである。ポストコロニアリズムの登場により、同様のことが『ロビンソン・クルーソー』に対しても起こっている。

もちろんポストコロニアリズムが登場する以前から、『ロビンソン・クルーソー』と大英帝国とを結びつけた解釈はなされてきた。¹⁰ しかし、サイドが主張するような観点から、つまり、帝国を構築する側と植民地化された側との闘いにおいて言説上の闘争は極めて重要であるという観点から『ロビンソン・クルーソー』が分析されたことはなかった。このように『ロビンソン・クルーソー』は小説の勃興や靈的自叙伝の伝統という側面のみならず、ヨーロッパ人がカリブ海先住民と遭遇するディスコースとしても論じられるべきなのである。

ポストコロニアリズムという新たな光を当てると、これまで展開されてきた経済的個人主義を重視する解釈と、宗教的解釈とが共に『ロビンソン・クルーソー』に含まれる、帝国形成を促す力を等閑視していることがわかる。まずは、経済的個人主義に基づくアプローチから見ていこう。

3 経済的個人主義に基づくアプローチの再検討

ワットはクルーソーについて次のようにまとめている。

That Robinson Crusoe, like Defoe's other main characters, Moll Flanders, Roxana, Colonel Jacque, and Captain Singleton, is an embodiment of economic individualism hardly needs demonstration. All Defoe's heroes pursue money, which he characteristically called 'the general denominating article in the world'; and they pursue it very methodically according to the profit and loss book-keeping which Max Weber considered to be the distinctive technical feature of modern capitalism. Defoe's heroes, we observe, have no need to learn this technique; whatever the circumstances of their birth and education, they have it in their blood, and keep us more fully informed of their present stocks of money and commodities than any other characters in fiction.¹¹ (下線は筆者)

ワットが指摘するように、主人公クルーソーは「経済的個人主義」を体現しており、常に自分の経済状態を読者に報告し続ける。最初にクルーソーが具体的金額を出すのは二度目に船に乗った時であり、ギニア貿易船の船長と知り合ったクルーソーは船長の指示で40ポンド相当の雑貨類をロンドンで仕入れる。¹²ギニアに着くとそれらを売りさばき、その代金で5ポンド9オンスの砂金を買ひ、帰国後ロンドンでその砂金を売って300ポンドを得る。元手を7.5倍にするという大成功を皮切りに、クルーソーは克明に「金銭や財の現在残高」を読者に伝え続けるのであり、クルーソーが「経済的個人主義を具現化したもの」というワットの指摘は極めて的確である。また、元手となった40ポンドの入手経過が詳しく述べられることにより、デフォー小説の特徴としてしばしば挙げられる「真実らしさ」(verisimilitude)が付与されている。

ギニアへの最初の航海で300ポンドを稼いだクルーソーはその3分の2にあたる200ポンドを恩人の船長の未亡人に預けておく(船長は帰国直後に亡くなっている)。クルーソーのギニア商人としての二度目の航海は不運に見舞われる。トルコ海賊船に船は拿捕され、クルーソーはムーア人の奴隷となり、船に持ち込んだ3分の1にあたる100ポンドは失われる。ムーア人のもとから何とか逃げ出したクルーソーは海上でさまよっている

ところをポルトガル船の船長に救出され、逃げ出すときに使った船などを買い取ってもらった結果、220 スペインドルを手にする。¹³ クルーソーは上陸したブラジルでこの220 スペインドルを元手に砂糖農園を始める。

一方、ロンドンに残された200ポンドが無駄になることはない。ポルトガル船長の勧めにより、その半分をブラジルでの農園経営に必要な品にロンドンで代えてもらい、ロンドンからリスボンに送られた商品をポストガル船長にブラジルへ船で持ち帰ってもらうことによって、クルーソーは元手の100ポンドに対して「4倍以上の利益」をあげる。そのおかげで、黒人奴隷とヨーロッパ人の召使いを手に入れることが可能となる。¹⁴

この後、同じように農園を営む三名の仲間たちに依頼され、クルーソーは私的に黒人奴隷を入手するため、再度ギニア貿易を行うことを決める。当時、奴隷の入手はスペイン王やポルトガル王の特別許可（アシェント）を得たものが独占していたのであるが、こうした正式な手続きを経ずに、クルーソーらは黒人奴隷を私的に入手しようとしたのであった。この航海でクルーソーの乗った船は難破し、彼のみが生き残って孤島に漂着し、28年に及ぶ孤島生活の幕が上がる。

クルーソーの財政状態に着目すると、彼が失踪していた長い年月は彼にとって極めて有利に働いている。ブラジルを離れる際に、周到な指示を与えておいたこともあり、クルーソーが不在の間も砂糖プランテーションは極めて順調に利益を上げ、作品の最後でクルーソーが自分の農園を売ろうとした時には33000 スペインドルで売ることができたのである。

And . . . I resolv'd to stay at Home, and if I could find Means for it, to dispose of my Plantation. To this Purpose I wrote to my old friend at *Lisbon*, who in return gave me Notice, that he could easily dispose of it there: But that if I thought it fit to give him Leave to offer it in my name to the two Merchants, the Survivors of my Trustees, who liv'd in the *Brasils* [sic], who must fully understand the Value of it, who liv'd just upon the Spot, and who I knew were very rich; so that he belive'd they would be fond of buying it: he did not doubt, but that I should make 4 or 5000 Pieces of Eight, the more of it.

Accordingly I agreed, gave him Order to offer it to them, and he did so; and in about 8 Months more, the Ship being then return'd, he sent me Account, that they had accepted the Offer, and had remitted 33000 Pieces of Eight, to a Correspondence of theirs at Lisbon, to pay for it.

In Return, I sign'd the Instrument of Sale in the Form which they sent from Lisbon, and sent it my old Man, who sent me Bills of Exchange for 32800 Pieces of Eight to me, for the Estate; reserving the Payment of 100 Moidores a Year to him, the old Man, during his Life, and 50 Moidores afterwards to his Son for his Life, which I had promised them, which the Plantation was to make good as a Rent-Charge. And thus I have given the first Part of a Life of Fortune and Adventure, a Life of Providence's Checquer-Work [sic], and of a Variety which the World will seldom be able to show the like of: Beginning foolishly, but closing much more happily than any Part of it ever gave me Leave so much as to hope for.¹⁵ (下線は筆者)

引用の下線部が示しているように、売却金額 33000 スペインドルが、何の説明もなく為替手形の額面としては 32800 スペインドルになっている。これは商業活動に通暁していたデフォーが、為替手形の手数料として 200 スペインドルを引いたためであり、こうした細部の積み重ねが、デフォー作品のもつ「真実らしさ」を生み出しているといえるだろう。

このように奴隷として使役されていたムーア人のもとから逃げ出したときに得た 220 スペインドルと、ロンドンに残した 200 ポンドの半分が、最終的には 33000 スペインドルという莫大な財産に変わるのである。

ワットのようにクルーソーをミドルクラスの代弁者とみなす論者は『ロビンソン・クルーソー』に見られる主人公の堅実な（非冒険的な）勤勉さ、たゆまぬ労働等を礼賛する傾向があるが、これまで見てきたようにクルーソーが最後に築き上げる莫大な富は、ミドルクラス倫理に則った行動によってもたらされたものではないことに留意すべきである。クルーソーが人生の総決算として得る巨富は、クルーソーが不在地主という立場にあった約三十年という年月をかけて、アフリカの人的資源とアメリカの物的資源との搾取によって成り立つ砂糖プランテーション経営によって築き上げ

られた富なのだ。

クルーソーによる財の蓄積というプロセスを詳しく見ていくと、ギニア貿易という形で、植民地維持に欠かせない三角貿易の一端をクルーソー自身が担っているという問題や、奴隷を使った砂糖プランテーション経営の問題など、ポストコロニアリズムに関わる諸問題が次々と浮上してくるのである。

4 宗教的アプローチの再検討

ロシアフォルマリズムが強調した文学用語に前景化 (foregrounding) という言葉があるが、どのようなアプローチも整合性をもつ解釈を作品から生み出す際に、作中の特定部分を前景化することが多い。これは逆に言うと、作中の特定部分を後景化・周辺化 (marginalizing) していることになる。クルーソー批評に大きな影響力をもつ宗教的解釈も同様の傾向を有している。以下では宗教的解釈を丹念にたどりながら、この解釈が周辺化しているポストコロニアル的な見方をすくい上げてみたい。

まず、宗教的読解の代表的論者であるハンターの解釈を引用する。

Robinson Crusoe clearly is more like contemporary adventure stories than like the travel books . . . But more important, *Robinson Crusoe* has a larger coherence than that produced by the narrative sequence — a coherence which ultimately separates *Robinson Crusoe* from both travel literature and adventure stories, for books in both the latter traditions lack an informing idea which gives a meaning to individual events or to the sequence as a whole. These books seem to lack ideological content, and no thematic meaning can be abstracted from them *Robinson Crusoe* is structured on the basis of a familiar Christian pattern of disobedience-punishment- repentance-deliverance, a pattern set up in the first few pages of the book. Crusoe sees each event of his life in terms of the conflict between man's sinful natural propensity, which leads him into one difficulty after another, and a watchful providence,

which ultimately delivers man from himself.¹⁶ (下線は筆者)

ハンターの論じるように、作中における宗教的要素は確かに濃厚であり、回心に至るパターンはこの作品に統一性を与えているように見えるのだが、宗教的読解がもつ最大の難点は、父の命に背くことでクルーソーが大成功を収めるといふ、悪因善果という形のねじれ構造にある。もちろん孤島に28年間閉じ込められるという罰を受け、最終的には回心に至ったからこそ、クルーソーの成功はもたらされたのだと解することも可能だが、宗教的解釈が生み出される際に周辺化された部分を丁寧に見ていくと、宗教的理解を掘り崩しかねない記述が様々な箇所が存在していることがわかる。まず、父がミドルクラスを礼賛し、クルーソーの放浪癖をたしなめる有名なエピソードに至るまでの冒頭部分を詳しく検討してみよう。

クルーソーの父が、ミドルクラスを賛美する、最もよく知られた箇所は次の部分である。

He bid me observe it, and I should always find, that the Calamities of Life were shared among the upper and lower Part of Mankind; but that the middle Station had the fewest Disasters, and was not expos'd to so many Vicissitudes as the higher or lower Part of Mankind; nay, they were not subjected to so many Distempers and Uneasinesses either of Body or Mind, as those were who, by vicious Living, Luxury, and Extravagances on one Hand, or by hard Labour, Want of Necessaries, and mean or insufficient Diet on the other Hand, bring Distempers upon themselves by the natural Consequences of their Way of Living; That the middle Station of Life was calculated for all kind of Vertues [sic] and all kinds of Enjoyments; that Peace and Plenty were the Hand-maids of a middle Fortune; that Temperance, Moderation, Quietness, Health, Society, all agreeable Diversions, and all desirable Pleasures, were the Blessings attending the middle Station of Life; that this Way Men went silently and smoothly through the World, and comfortably out of it . . . (pp. 4-5).¹⁷ (下線は筆者)

このように父親は「中くらいの身分」(the middle State)にあるものがどれほど幸せに暮らせるかを切々とクルーソーに説く。上流階級のように悪習に染まった享樂的生活に陥ることもなければ、下層階級のように過酷な労働に耐えながら日々の糧にも困るといった苦痛を味わうこともないと述べ、ミドルクラスがどれほど恵まれているかを滔々と語る。

父は自分たちが属する社会階層が最も幸福に満ちており、節制、中庸、平穩、健康、社交といった素晴らしい楽しみや喜びがあるとクルーソーに説諭する。しかしながら、作品冒頭から、このよく知られた箇所に至るまでの部分を詳しく見てみると、父自身は自らの言葉を必ずしも実践してこなかったことが明らかになる。そもそもクルーソーの父は英国人ではなく、ドイツ人である。故郷ブレーメンを離れた後、英国の港町ハルにおいて貿易業によって成功を収め、ヨークに落ち着いた人物との設定になっている。

このような人物が、自分と同じように故郷を離れて運試しをしようとしている息子に、重々しく教訓を与えるという構図は少々アイロニカルである。また、父の後を継ぐべき長男は父の諫めを聞かず、軍人となって戦死しており、次男も行方がわからないままとなっている。三男であるクルーソーも両親の願いを聞き入れず船乗りになってしまうことからすると、クルーソーがもつ「単なる放浪癖」(a mere wandering Inclination)は、クルーソー自身の罪というよりは、父方から受け継いだ気質なのではないかという疑念さえ生じてくる。

また父はクルーソーを法律家にするつもりだったようだが、それならば地方にある無償の学校(Country Free-School)に通わせるだけでは全く不十分であり、大学へ行かせる必要があったろう。¹⁸このように、「中くらいの身分」の素晴らしさを息子に教え諭すという、有名な場面にたどり着くまでに、父の訓戒それ自体を疑問視させるような要素がいくつも存在している。宗教的解釈においては、父の訓戒に従わず、神命に背くという行為がクルーソーの原罪を形作るのであるから、父の訓戒についての信憑性に疑問符が付くということは宗教的解釈の根幹を揺るがすことになる。

そして、宗教的解釈が最も「周辺化」したいことは、クルーソーが原罪を犯した結果、彼に与えられるのが懲罰ではなく、莫大な報酬となっているというパラドックスである。具体的には、ギニア貿易商人として荒稼ぎをするエピソードや、植民地農園経営者として大成功を収めるという結末である。ハンターらの宗教的解釈においては、これらのパラドックスは等閑視されているが、ポストコロニアリズムの視点に立つと、極めて目立つ逆説となる。

作品の終わりでクルーソーが、首尾良くブラジルの砂糖農園を売却した後、彼は自分の人生を次のように要約する。

And thus I have given the first Part of a Life of Fortune and Adventure, a Life of Providence's Checquer-Work [sic], and of a Variety which the World will seldom be able to show the like of: Beginning foolishly, but closing much more happily than any Part of it ever gave me Leave so much as to hope for (pp. 303-4). (下線は筆者)

故郷を捨てるという「愚行で始まったものの、これ以上望むべくはないというほどの幸福な結末」を迎えることができた原因を突き詰めるならば、それは父の願いを聞かず、神意に背いたからなのであり、この構図を「前景化」するならば、宗教的解釈には収まらないねじれ現象が起きていることが明らかになる。

スターやハンターらが詳述したように、作品の随所に見られる宗教的要素を重視すれば、『ロビンソン・クルーソー』は確かに「回心へと至るパターン」を備えているといえるだろう。だが同時に、ポストコロニアリズムという新たな視座からこの作品をとらえるならば、別のパターンを見出すことも可能である。ギニア貿易商人としての成功や、植民地での農園経営がもたらす莫大な富が詳細に描かれている『ロビンソン・クルーソー』は、読者に海外進出熱を引き起こし、植民地での農園経営への夢をかきたてることによって、大英帝国形成という当時の英国が抱いていた大望を鼓舞するというパターンをも内包しているのである。 (次稿に続く)

注

- 1 Ian Watt, *The Rise of the Novel: Studies in Defoe, Richardson and Fielding*, (1957; 2nd ed., Peregrine Books, 1963) p. 35.
- 2 G. A. Starr, *Defoe and Spiritual Autobiography* (Princeton UP, 1965). Paul J. Hunter, *The Reluctant Pilgrim: Defoe's Emblematic Method* (Johns Hopkins UP, 1966).
- 3 拙稿「文学理論の隆盛について」『関西大学文学論集』第49巻第4号参照.
- 4 Watt, p. 72.
- 5 拙稿「文学理論の隆盛について」参照.
- 6 Homer O. Brown, "The Displaced Self in the Novels of Daniel Defoe" in *Journal of English Literary History* 38 (1972): 562-90.
- 7 Edward Said, *Culture and Imperialism* (Vintage, 1994), pp. xii-iii.
- 8 Said, p. 7.
- 9 Said, p. 94.
- 10 Pat Rogers, *Robinson Crusoe* (Allen and Unwin, 1979) が詳しい.
- 11 Watt, pp. 69-70.
- 12 Daniel Defoe, *Robinson Crusoe* (The World's Classics, 1972), p.17. 以下、丸括弧内に該当する頁を記す.
- 13 Ibid., p. 34. スペインドルにあたる言葉は Piece of Eight となっており、これは8リアル銀貨のことを指す.
- 14 Ibid., p. 37.
- 15 Ibid., pp. 303-4.
- 16 Paul J. Hunter, *The Reluctant Pilgrim: Defoe's Emblematic Method* (Johns Hopkins UP, 1966), pp. 18-9.
- 17 *Robinson Crusoe*, pp. 4-5.
- 18 拙稿「デフォーの自負と不安—彼のジェントルマン論をめぐって—」『彦根論叢』第264号参照.